

昔むかし、あるところに、三びきのくまがいました。小さいちっぽけなくまと、中ぐらいのくまと、大きいでつかいくまでした。くまたちは、森の中の一軒家いっけんやに住んでいました。くまたちは、それぞれ自分用のおちやわんを持っていました。小さいちっぽけなくまのは、小さいちっぽけなおちやわんで、中ぐらいのくまのは、中ぐらいのおちやわんで、大きいでつかいくまのは、大きいでつかいおちやわんでした。それから、くまたちは、それぞれ自分用のいすも持っていました。小さいちっぽけなくまのは、小さいちっぽけないすでした。中ぐらいのくまのは、中ぐらいのいすで、大きいでつかいくまのは、大きいでつかいすでした。それから、くまたちは、それぞれ自分用のベッドも持っていました。小さいちっぽけなくまのは、小さいちっぽけなベッドで、中ぐらいのくまのは、中ぐらいのベッドで、大きいでつかいくまのは、大きいでつかいベッドでした。

ある日のこと、くまたちは、朝ごはんにおかゆを作りました。あつあつのおかゆをそれぞれのおちやわんによそうと、口をやけどしないように冷ましておくことにしました。おかゆが冷めるのを待つあいだ、くまたちは森へさんぽに出かけました。

さて、くまたちが出かけているあいだに、おばあさんがひとり、くまたちの家にやってきました。おばあさんは、まだから家の中をのぞき、それからドアのかぎあなからのぞきました。そして、家の中にだれもないのが分かると、そつとドアをおしてみました。カギはかかっていますでした。そこで、おばあさんはドアを開けて中へ入っていきました。すると、テーブルの上におかゆがのっていました。おばあさんは、大よろこびでおかゆを食べはじめました。

まず、大きいでつかいくまのおかゆを食べてみました。あつくてとても食べられませんでした。おばあさんはぶつぶつもんくをいいました。つぎに、中ぐらいのくまのおかゆを食べてみました。つめたすぎます。おばあさんはまたぶつぶつもんくをいいました。それから、小さいちっぽけなくまのおかゆを食べてみました。あつくもつめたくもなくちようどいいあんばいだったので、おばあさんは、すっかり平らげてしまいました。でもおちやわんが小さくてちよつとしか入ってなかったので、やっぱりぶつぶつもんくをいいました。

それからおばあさんは、大きいでつかいくまのいすにすわってみました。けれどもいす

は堅かたすぎました。おばあさんはぶつぶつもんくをいいました。つぎに中なかくらのくまのいすにすわってみました。やわらかすぎます。またぶつぶつもんくをいいました。それから、小さいちっぽけなくまのいすにすわってみました。堅かたくもやわらかくもなくちようどいいあんばいだったので、おばあさんは、いつまでもそのいすにすわっていました。それで、しまいにいすの底そこがぬけて、おばあさんはドシンとゆかに落おちつこちてしまいました。おばあさんは、やっぱりぶつぶつもんくをいいました。

それから、おばあさんは、二階ねべやの寝ね部屋べやに上がっていきました。そこには、くまたちのベッドがならんでいました。

おばあさんは、まず、大きいでっかいくまのベッドに寝ねてみました。頭のほうが高たかすぎてとてもねむれません。おばあさんはぶつぶつもんくをいいました。つぎに中なかくらのくまのベッドに寝ねてみました。足のほうが高たかすぎます。またぶつぶつもんくをいいました。それから、小さいちっぽけなくまのベッドに寝ねてみました。頭あたまも足あしも高たかすぎず、ちようどいいあんばいだったので、おばあさんは、いい気持ちでふとんをかぶり、ぐうぐうねむりこんでしまいました。

さて、くまたちは、もうおかゆが冷ひやめたころだと思って、家に帰かえってききました。すると、大きいでっかいくまのおちやわんにスプーンがつつこんであります。

「だれか、ぼくのおかゆに口くちをつけたな」と、大きいでっかいくまが、でっかい声こゑでいいました。見ると、中なかくらのくまのおちやわんにもスプーンがつつこんであります。

「だれか、ぼくのおかゆに口くちをつけたな」と、中なかくらのくまが中なかくらの声こゑでいいました。小さいちっぽけなくまが自分のおちやわんを見ると、中なかはからっぽでした。

「だれか、ぼくのおかゆに口くちをつけたな。そして、ぜんぶ食べちゃった」と、小さいちっぽけなくまがちっぽけな声こゑでいいました。

くまたちは、だれかが家いへに入いってきて、小さいちっぽけなくまのおかゆをぜんぶ食べたことがわかりました。そこで、家いへの中なかを見みまわしました。すると、大きいでっかいくまのいすからクッションが落おちつこちていました。

「だれか、ぼくぼくのいすいすにすわったな」と、大きいでっかいくまがでっかい声こゑでいいました。中なかくらのくまのいすはクッションがぺしゃんこにへこんでいました。

「だれかぼくぼくのいすいすにすわったな」と、中なかくらのくまが中なかくらの声こゑでいいました。小

さいちっぽけなくまが自分のいすを見ると、いすは底そこがぬけてぶっこわれていました。

「だれか、ぼくのいすにすわったな。そして、ぶっこわしちゃった」と、小さいちっぽけなくまがちっぽけな声でいいました。

くまたちは、もつとよく調べてみよう和二階の寝部屋に行きました。すると、大きいでつかいくまのベッドからまくらが落っこちていました。

「だれか、ぼくのベッドで寝たな」と、大きいでつかいくまがでつかい声でいいました。中くらいのくまのベッドはまくらがぺしゃんこにへこんでいました。

「だれか、ぼくのベッドで寝たな」と、中くらいのくまが中くらいの声でいいました。小さいちっぽけなくまが自分のベッドを見ると、まくらの上にだれかの頭が乗っかっていました。

「だれか、ぼくのベッドで寝たな。そして、まだ寝ているぞ」と、小さいちっぽけなくまがちっぽけな声でいいました。

おばあさんは、ぐっすりねむっていました。それで、大きいでつかいくまのでつかい声が聞こえても、風がうなっているか、かみなりが鳴っているのだと思いました。中くらいのくまの中くらいの声が聞こえても、ゆめの中でだれかがしゃべっているのだと思いました。けれども、小さいちっぽけなくまのちっぽけな声が、あんまりキーキーかん高い声だったので、おばあさんは、すぐに目をさましてとび起きました。すると、ベッドのわきにくまが三びき立っていました。おばあさんはベッドの向こうがわへ転がり落ちると、まどべに走って行って、まどから外へとび出しました。

それからおばあさんはどうなったのでしょうか。まどから落ちて首の骨ほねをおったのか、森ににげこんでだれも知らないところへ行ってしまったのか、おまわりさんにつかまって牢屋らうやにぶちこまれたのか、それはだれにも分かりません。でも、くまたちはそれから二度とおばあさんに会いませんでしたとき。

おしまい。

原語：『English Fairy Tales』JOSEPH JACOBS

訳・再話：村上郁